

第 11 回軽金属学会功労賞

軽金属学会功労賞は、永年にわたり軽金属学の発展ならびに当会の活動に顕著な貢献をした者に贈られる。軽金属学会功労賞選考委員会（委員長 吉原正昭）の審査を経て平成 21 年 2 月 26 日（木）に開催された第 94 回理事会において慎重審議の結果、以下の 3 名の授賞を決定、社団法人軽金属学会第 116 回春期大会第 1 日目の 5 月 21 日（木）に登別市において表彰式を挙行政した。

受賞者 関 史江 君 東京大学大学院工学系研究科マテリアル工学専攻助教 昭和 21 年 7 月 2 日生（62 才）

受賞理由



関 史江君は、昭和 46 年に東京大学に技術員として奉職し、その後、単結晶アルミニウムを用いた加工組織および再結晶集合組織形成機構に関する研究、コンデンサ用高純度アルミニウム箔に発達する立方体集合組織の研究に携わり、立方体方位の発達は、変形組織中の立方体領域の不均一な分布によることを明らかにするなどの業績を挙げた。その間、本学会で初の女性講演発表者として口頭発表を行い、また初の女性座長も務めた。本学会の運営面においては、研究部会、総務・広報・企画・関東支部運営などの委員会に参画し、本学会表彰における楯のデザイン、若手の会の立ち上げ、本学会ホームページの基礎の企画・作成、基礎教育に重点をおいたセミナー・基礎技術講座の企画などを行ってきた。さらに、本学会における女性会員比率が低いことを憂い、女性会員の会を発足させ、春秋大会時の会合開催に世話人として尽力してきている。

以上のように、同君は永年にわたりアルミニウムの集合組織について研究業績を挙げてきたのみならず、軽金属学会の運営に積極的に参画してきた。それら業績・活動は、本学会の発展に極めて大きく貢献したと認められ、ここに第 11 回軽金属学会功労賞を贈る。

受賞者 頓田 英機 君 熊本大学名誉教授 昭和 18 年 3 月 31 日生（66 才）

受賞理由



頓田英機君は、昭和 45 年 4 月に熊本大学工学部金属工学科（現 マテリアル工学科）に赴任した後、平成 20 年 3 月の退職までの間、38 年の永きにわたり、転位論および非鉄金属材料学に関する教育に携わってきた。その優れた講義に対し、2 回の熊本大学工学部ティーチングアワードを受賞した。研究面では、永年にわたってチタンやマグネシウム等の六方晶金属における塑性変形機構の解明に関する研究を推進してきた。特に、マグネシウム単結晶の非底面すべり系として 2 次錐面すべりが活動することを詳細に研究し、その降伏応力が温度上昇に伴い増加するという特異な挙動に対する転位機構の理論的解明を行い、1992 年に「軽金属」において論文発表をしている。

学会活動では、永年九州支部の幹事を務めるとともに、1998～1999 年には九州支部長を務めた。また 1999 年に熊本大学で開催した春期大会では、実行委員会副委員長として実質的な講演大会の運営を担当した。そのほか、本田技研熊本製作所、九州柳河精機、アーレスティ熊本を九州地区維持会員に迎え入れるなど、軽金属学会の運営に大きく貢献した。

以上の業績より、同君が本学会功労賞に極めてふさわしいと認め、ここに第 11 回軽金属学会功労賞を贈る。

受賞者 永田 公二 君 住友軽金属工業株式会社 顧問 昭和 15 年 9 月 1 日生（68 才）

受賞理由



永田公二君は、住友軽金属工業株式会社で研究開発センター所長として永年にわたり、アルミニウム材料の研究開発およびその発展に尽力した。また同時に、軽金属学会においても、副会長、理事を務め、その発展に貢献した。特に、学会の副会長かつ財務委員会委員長として、学会の財務基盤の強化に努め、その健全化を図った。これは学会の発展の基盤をなすものでその貢献は大きいものといえる。副会長の任を終えた後も理事として活動し、特に、広報委員長として、軽金属学会のパンフレット作成やホームページの開設、さらには圧延・押出の生産現場を紹介した DVD を作成し、教育用として大学に配布してものづくりの現場を PR した。

さらに、政府の材料戦略委員会委員として人材育成を積極的に推進し、小中学生から若手研究者まで含めた人材育成のための仕組みづくりを行い、その成果は現在の日本アルミニウム協会の中核人材育成プロジェクトなどに引継がれている。また、日本アルミニウム協会の建築構造協議会の会長としてアルミニウム建築の推進に携わった。

以上のように、永年にわたり、軽金属学会の運営ならびに活動、さらにアルミニウム関連協会の活動にも参加し、学会の発展ならびにアルミニウム産業の基盤構築に大きく貢献した。これらの業績が極めて顕著であると認め、ここに第 11 回軽金属学会功労賞を贈る。